開館30周年記念
2020高岡万葉セミナー

万葉の受容

●とき　令和2年9月5日(土) 10時20分～16時15分

●開講式 10:20 ～ 10:30

●第1講 10:30 ～ 12:00

万葉の夢歌と小町の夢歌　菊川恵三氏（和歌山大学教授）

万葉集から古今集へ、約150年の時を経て「和歌」は貴族社会の表芸として復活します。この間、和歌の何が変わって何が変わらなかったのか、とても興味あるテーマです。今回は夢の歌に焦点を当ててみます。すると不思議なことに、古今集一般の傾向とは外れた小野小町の秀歌（「思ひつつ寝ればや」「いとせめて恋しき時は」など）と、万葉の夢歌とのつながりが見えてきます。

●昼食 12:00 ～ 13:00

●第2講 13:00 ～ 14:30

「我が背子を大和へ遣ると」の語法をめぐって―「動詞終止形＋と」の展開―
吉井　健氏（武庫川女子大学非常勤講師）

我が背子を大和へ遣るとさ夜ふけて暁露に我が立ち濡れし（万葉集105）
これは大津皇子を見送る大伯皇女の歌である。万葉集には、このような、動詞終止形に「と」の付いた節を持つ歌がたくさんある。このような節を持つ歌は、
物思ふと 月日の行くも 知らざりし 雁こそ鳴きて 秋を告げつれ（後撰集358）
のように、平安時代にも見られるが、かなり少なくなる。こうした「～と」を含む歌について跡づけたい。

●第3講　14:45 ～ 16:15

斎藤茂吉の万葉集受容―物理学流行の時代背景とともに―
田中 教子氏（歌人）

斎藤茂吉は、その著書『万葉秀歌』に「作歌稽古のため」と記すように、彼の万葉集の観賞や分析は実作の方法を学ぶためのものであった。その中で彼がこだわった「声調」は、これまで恣意的とされてきたが、物理学の現象「屈折」「ゆらぎ」「波動」「圧搾」「顫動」などに喩えて呼んで、分類意識があることがわかる。物理大ブームの時代を背景に書かれた茂吉の万葉集の声調論についてお話ししたい。

交通のご案内

◆最寄り駅JR氷見線　伏木駅から
【当館までの距離 約1.5km】タクシーで約5分、徒歩約25分

◆JR・あいの風とやま鉄道　高岡駅から
【バス】高岡駅前（北口）のりば④
加越能バス伏木方面（西回り）・伏木方面（東回り）のいずれかに乗車（約30分）して「伏木一の宮バス停」で下車、徒歩約7分
【タクシー】約20分
※「北陸新幹線 新高岡駅」と「JR・あいの風とやま鉄道 高岡駅」の間は、10分間隔でバス便があります。（所要時間約10分）

◆お車で
【能越自動車道】高岡北インターから約20分、高岡インターから約25分
【北陸自動車道】小杉インターから約35分、高岡砺波スマートインターから約35分

新型コロナウイルス感染予防・拡大防止対策へのご協力お願い

1　次の方につきましては、来館・セミナー受講の自粛の協力をお願いします
・発熱や、軽度であっても咳・咽頭痛などの症状がある方
・直近2週間の海外渡航歴のある方及びその方と濃厚接触があった方

2　来館・セミナーの受講の際には、以下の点にご協力をお願いします
・必ずマスクの着用をお願いします
・入館前のアルコール消毒による手の消毒
・咳やくしゃみをされる際の『咳エチケット』
・講義室は換気に努めますので服装等にご留意願います